秋田魁新報　2022年09月27日付　県南

大仙市で現場見学会

建設業の先端技術体験

大曲工高生 進歩、安全性を実感

担い手不足が課題となっている建設業界に関心を持ってもらおうと、情報通信技術（ICT）を活用した建設現場の高校生向け見学会が、大仙市協和峰吉川の雄物川沿いで行われた。大曲工業高校土木・建築科の1、2年生47人がテクノロジーを駆使した先端の現場を体験した。

■　■

県仙北地域振興局建設部と県仙北建設業協会が20日に開催した。現場は雄物川の築堤、護岸などの工事が行われている。生徒たちは実際に機器を操作したり、現場の担当者から建設業界におけるICTの利便性などの説明を受けたりしながら、各ブースを見学して回った。

このうち、施工箇所の3次元データが搭載されたバックホーでは、生徒が実際に運転席に座りレバーを操作。片手だけで斜面に沿って正確にアームを動かした。バックホーとデータが連動するため、動きが自動で制御される。かつては複数の可動部分を同時に操作する必要があったため、斜面に沿って動かす操作は熟練の技術が求められたという。

また、バックホーの作動状況が映し出されたタブレット端末も手にし、遠隔で現場の仕事を確認できることも学んだ。

2年生の小松萌尚さん(17)は「ICTで以前はできなかったことができるようになり、現場の安全面が向上し、仕事も早くなっていると感じた」。1年生の横山海月さん(15)は「いろいろな技術が導入されており現場がとても進歩している。土木関係で働く父から、技術が進歩して仕事にやりがいがあり楽しいと聞いていた。私もみんなの手助けができる仕事に就きたい」と話した。

現場の工事を受注した秋田振興建設（大仙市）の小原貴取締役は「汗水垂らす力仕事だけが建設現場の仕事ではなくなっている。昔のやり方とは全然違う。今の子どもたちは電子機器の操作にもなじみがある」。トイレなども含めた現場環境は、この10年で大きく進歩したと説明する。

県仙北地域振興局企画・建設課の加賀良宏課長も「生徒の親世代にはきつい、危険といった業界のイメージがまだあるかもしれない。そうした部分は技術でなくす取り組みが進んでいることを保護者にも知ってもらいたい」と話した。

（石塚健悟）

ドローンの操作や現場での活用について説明したブース

バックホーの操作状況をタブレットで確認する生徒たち

バックホーを操作する生徒（左）。かつては熟練の技術が求められた

©秋田魁新報社